

ス茲ニ第五高等學校開校三十週年記念式舉行ニ際シ校長ノ具申ヲ領シテ特ニ之ヲ録シ感謝ノ意ヲ表ス

大正九年十月十日

省文印

文部大臣 正四位勳一等 中橋 徳五郎

同本校の
顯彰狀の

本校の顯彰狀

第五高等學校教授從四位勳三等 杉山 岩三郎

多年教育ノ任ニ膺リ功績顯著ナルヲ以テ文部大臣ヨリ旌表セラレタリ、仍テ茲ニ時計一箇ヲ贈リ其ノ榮譽ヲ顯彰ス

大正九年十月十日

第五高等學校

龍南會の
行事並に
事業の數

龍南會の行事及び事業に就いては、第五高等學校開校三十週年記念祝賀會報告に依れば、職員卒業生生徒の齎出金總額八千四百九十九圓二錢の中、六千九百五十八圓四十四錢を記念事業費として龍南會に寄贈し、龍南會はそれに依つて、端艇新造及艇庫修築費補足、野球固定ネット建造費、庭球コート新設費、弓術道場修築費、記念雜誌發行費補足、角力士俵修築費、ハードル購入費、記念植樹費、演說劍道柔道野球庭球相撲弓術大會費、山岳美術各展覽會費、運動會補足、記念歌作譜謝禮、野球競技場競走路各修築費、其他に充てたのであるが、なほ大正九年度龍南會費決算書に依れば、三十年記念祝賀會より四千六百二十七圓三十三錢を受入れ、總務部より、三十年記念ハードル、運動會費補助、記念作歌譜禮共一千七百十八圓五十五錢、演說部、雜誌部、劍道部、柔道部、弓術部、庭球部、山岳部等夫々の支出があり、弓術部の道場修築、庭球部のコート新設、野球部の固定ネット

ト等が新に出來、大正十年決算書に依れば、野球競技場競走路修築費二千二百十八圓を支出し、十一年度は、記念植樹費十八圓五十錢を支出してゐることを以て察することが出來よう。而してトラックの改造は、大正十四年四月十一日、細川侯の臨場を以て、トラック開きを催してゐるのである

第四節 今上陛下の行幸と御親閱

今上陛下には、肥筑の山野に於て行はせられる陸軍特別大演習御統監の爲、昭和六年十一月八日朝宮城御發聲、横濱港にて御召艦榛名に御便乘、第八驅逐隊朝霧、狹霧、天霧の各艦を從へさせられ、海路御恙なく十日の夕佐世保港外黒島沖に御假泊、翌十一日朝御上陸あらせられ、同日午後三時十五分熊本驛に御着、驛頭に街路に蟻集堵列する幾十萬人の奉迎を受けつゝ、直に大本營たる偕行社に入らせ給うた。

かくて御休養もあらせられず、十二・十三の兩日に互りて、龍馭白雪號を召して、雨中も御厭ひなく御統監を了らせ給ひ、十五日午前には帶山練兵場に於ける大觀兵並に十三聯隊營内に於ける御賜饌場に親臨、午後には山口・九州・沖繩各縣消防組御親閲の後、一旦大本營に還御、縣下二十三箇所に聖駕を枉げて、親しく地方の民情學事を嚮はせ給はんと、先づ熊本縣應に行幸の後、直に本校に御臨幸あらせられたのである。

是より先、地方行幸係より此の通牒に接するや、我が校は俄に生氣と歡喜とに漲り、武藤校長の宮内省出頭を始として、行幸奉迎事務分掌規程を定めて、總務部・陳列係・競技係・生徒係・接待係・警備係・設備係・衛生係・樂隊係・記録係・寫眞係・經理係の諸係を設け、學校奉迎の準備に精勵して、萬遺漏なきを期したのであ

御發聲よ
り御安着
まで

御統監後
の御動靜

奉迎の諸
準備

る。殊に、今上陛下には、既記の如く過ぐる大正九年三月三十一日、未だ東宮に在せし頃、玉歩を我が龍南に運ばせ給ひ、茲に再び陛下を迎へ奉ることは、何物の光榮か之に及ぶものがあらう。今、同年十二月十九日本校より地方行幸係長宛に送達せる、特別大演習並地方行幸記録に關する回答文「當校ニ於ケル行幸記録」に基いて、當時を偲び奉りたいと思ふ。

行幸の御模倣



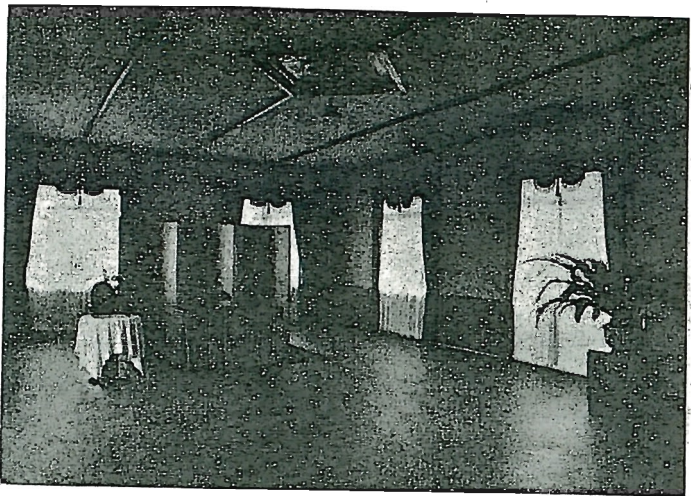
行幸記念の珊瑚樹

十一月十五日午後、縣廳御臨幸を終らせ給へる。天皇陛下には、縣下諸學校への車駕を先づ本校へ進めさせ給うた。此の日残雲未だ全く散せず、午後三時、全員奉迎の位置に就き、恭しく御着輦を待ち奉れば、細雨霏々として過ぎ行く折しも、偶々二條の虹霓相並んで東天より校地の空に互り、七彩洵に鮮麗、夕陽を翳へる薄雲亦漸く開きて燦然、變々たる瑞氣爲に彌々濃かなるを覺えた。

やがて略式自動車函薄にて校門をいらせ給へば、生徒吹奏團の吹奏する「君が代」啾唳として響き渡り、文部大臣代理中川文部次官、武藤校長外六名は事務所玄關右側にて、その他の教官等二十九名は左側生徒課入口近くにて、生徒總代二十六名は中門附近の樂團に隣接して、靜肅に待ち奉つた。かくて午後四時七分着御、校長の御

先導にて便殿なる會議室に入らせられ、直に文部次官、學校長外六名に單獨拜謁を賜はり、更に約五間分に互つ

天覽品の種目



玉座(會議室)

て學校長の奏上する本校の概況を聞召され、次で列立拜謁場に充てられたる生徒圖書閣覽室に入らせ給ひ、教官等二十二人に列立拜謁を賜はつた。それより天覽品を陳列せる教官圖書閣覽室に玉歩を移させ給ひて、關係教官侍立の上、學校長の御説明を御聽取遊ばされつゝ、陳列品を御覽あらせられたのである。而して天覽品の種目は、概要左の如きものである。

國文に關するもの

古今餘材抄 著者契沖の自筆本

檜垣嫗家集註 著者中島廣足の自筆本

郷土史に關するもの

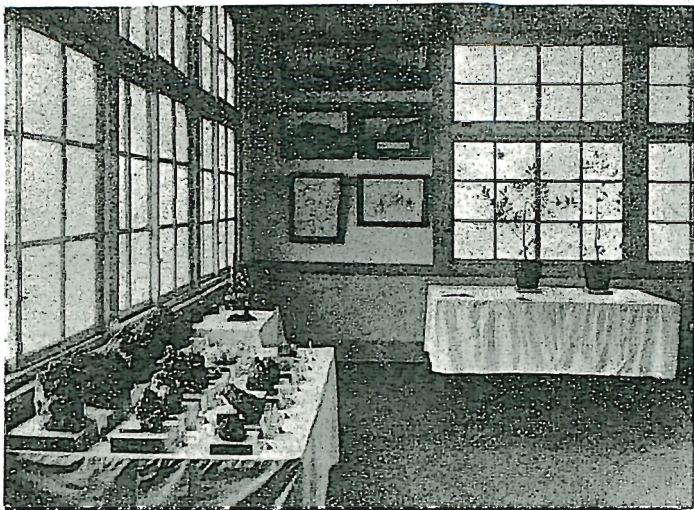
人國記 傳北條時頼著元祿十四年刊

肥後物語 龜井南冥著中山默齋舊藏本

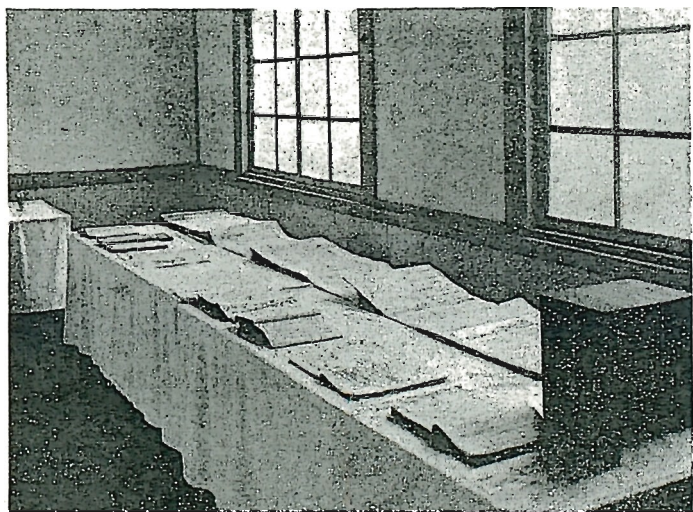
國賢帖 肥後先哲遺墨集

漢文に關するもの

大廣益會玉篇元の至正年間刊慶長九年翻刻



天覽室



動物に關するもの

しらうをの標本數種

植物に關するもの

立田山自生やへくちなし

鑛物に關するもの

甲 熊本附近尾平産 鑛物標本十五點
 熊本附近木浦産 鑛物標本四點

乙 顯微鏡下に於ける屈折率測定一案

當校山岳部員の山岳踏査報告

圖畫

理科一年生 自在畫

理科一、二、三年生 用器畫

天覽品陳列室より、學校長の御先導にて、校庭武夫原へ出御あらせられ、玉座に上らせ給ひ、西側に整列せる教官及び生徒、南側東寄りに整列せる職員家族の最敬禮を受けさせ給へば、全員齊しく生徒吹奏樂團の吹奏に和して、「君が代」を一回唱へ奉る。次で學校長は、運動競技開始の旨を言上し、四百米突繼走競技・圓盤投競技・走高飛競技・ラ式蹴球戦各種目参加員の、極めて緊張せる活動を叙覽あらせられた。

運動競技了るや、學校長の發聲にて、

天皇陛下萬歳を三唱し奉つた。かくて國家奏樂の中に玉座を退御あらせられ、再び便殿にて御少憩の後、午後四時四十二分、玄關右側に於ける教官及び生徒總代の奉送を受けさせ給ひつゝ、龍顔いとも麗しく、熊本高等工業學校へ向はせ給うたのである。

而して武藤校長の奏上書は次の通りである。

奏上書

武藤校長
の奏上書

第五高等學校長巨武藤虎太謹ミテ白ス

畏クモ

天皇陛下

陸軍特別大演習御統監ノ爲メ大森ヲ熊本縣下ニ進メサセ給ヒ本日本校ニ

行幸ノ光榮ヲ賜ハル本校ハ曩ニ大正九年三月

皇太子殿下ノ御砌

台臨ヲ賜ハリ今回再ヒ

行幸ノ光榮ニ浴ス臣等恐懼感激ノ至リニ堪ヘス恭シク拜謝シ奉ル臣虎太乏キヲ本校校長ニ承ケ日夜兢兢トシテ

惟其ノ任ヲ曠ウセンコトヲ恐ル謹ミテ學校現狀ノ要領ヲ奉上シ奉ル

本校ハ明治二十年四月ノ創立ニ係リ爾來四十四年有餘ヲ閱シ其ノ間屢次法令規則ノ改正醫學部工學部ノ設置
校名ノ改稱學級ノ増加學科課程ノ變更等アリ大正八年四月以來改正法令ニ據リ文科理科ト分チ規定ノ學科ヲ

授クルコトトナリ現在校長以下職員一同協力シテ校運ノ進展ト内容ノ充實トヲ期セリ現在職員ハ校長教授生徒主事助教講師等ヲ併セテ五十四人事務員ハ書記以下雇傭託ヲ通シテ二十三名外ニ外國人教師二名アリ生徒ノ定員ハ三學年ヲ通シテ文科理科各十二學級計二十四學級九百六十人ニシテ現在在學者九百〇二人ナリ其ノ内校内習學寮ニ收容セル者二百十三人其ノ他ハ通學生トス又創立以來卒業者ハ七千九百二十六人ニ上リ其ノ多クハ帝國大學ヲ卒ヘ或ハ進ンテ學術ノ研鑽ニ努メ或ハ社會各方面ノ事業ニ從ヒ各自力ヲ國家ノ興隆ニ盡セリ

本校教育ノ方針ハ明治二十三年十月三日御下賜ノ教育ニ關スル

勅語ノ

聖旨ヲ遵奉シ生徒ヲシテ國民精神ノ涵養品性ノ陶冶智能ノ開發身體ノ發育ニ留意セシメ之ヲ貫クニ自發自治ノ精神ヲ以テセシム各教官ハ常ニ專心教授ニ從事スルト共ニ校務ノ容ス限リ文部省及地方廳ノ依囑ヲ受ケテ講習會ヲ開キ或ハ地方ノ要請ニ應シテ講演指導ヲ行ヒ以テ社會教化ノ爲メ盡ス所アリ

又中等學校教員養成ノ目的ヲ以テ大正十五年四月校内ニ第十三臨時教員養成所ヲ設ケラレ數學若クハ國語漢文ヲ教授セルカ其ノ職員ハ第五高等學校職員ヲ以テ之ニ充テ教授及事務ヲ擔當セシム現在ノ生徒ハ數學科ニ十八人ニシテ明年三月卒業ノ豫定ナリ

尙ホ詳細ノ事項ハ第五高等學校及第十三臨時教員養成所要覽ニ具セリ臣虎太辱ク

御前ニ咫尺シ感激ノ至リニ任フルナシ謹ミテ教學振興ノ

聖旨ヲ奉體シ益々報効ノ誠ヲ竭サンコトヲ期ス

右畏ミテ奏上シ奉ル

昭和六年十一月十五日

第五高等學校校長 武藤虎太郎

天覽室に於ける臨時側近奉仕者氏名

天覽室に於ける臨時側近奉仕者

學校長

武藤虎太郎

地質礦物説明者

教授 中島欽三

植物及山岳部出品説明者

教授 淺井東一

國文説明者

教授 田中辰二

動物説明者

教授 高橋仁助

郷土史料説明者

教授 高橋良人

漢文説明者

講師 岡井慎吾

(國文説明者は、初め八波教授に充てられてゐたが、辭退の爲、田中教授之に代つたものである。)

國歌吹奏團種目及人名

國歌吹奏團種目及人名

係長 教授 音樂部長 野村武衛、係 教授 高津 巖

指揮 生徒 中村 公一

團員 ビツコロ 川崎博。フリユイト

桑原謙之、堤可夫、遠矢幸衛。第一クラリネット 清水徳久、佐野

英夫。第二クラリネット、泉亨次。第一コルネット 藤掛

哲夫。第二コルネット 服部久禧。トラムベツト、戸島新

一。アルト 坂本二男。第一バリトン 伊東俊次、植原明

夫。第二バリトン 吉川丞一。第一トロンボーン 戸田茂

夫。第二トロンボーン 海城濟。バス 岡田裕、前田利之。大

太鼓 金堀伸夫。小太鼓 千坂不二夫

御前運動競技種目及人名

係長 講師 陸軍歩兵中佐 永田多門 係 教授 陸上競技部

長 松尾精一、教授 ラグビー部長 菅野寅夫、助教 教授

橋本順治、講師 陸軍歩兵特務曹長 峯繁一

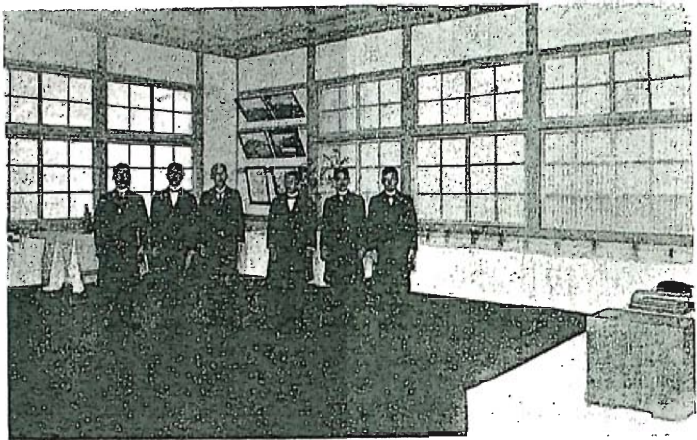
一、陸上競技

役員 出發合圖員 古野良雄。決勝審判員 菊地昌二、池上藝、

仲町容。計時員 上原鎮雄、佐々木菊丸、下村彌太郎。

走高跳審判員 大宮敏郎、福崎清、渡邊英一。圓盤投審

御前運動競技種目及人名



天覽室の臨時側近奉仕者 桑原謙之、堤可夫、遠矢幸衛。第一クラリネット 清水徳久、佐野英夫。第二クラリネット、泉亨次。第一コルネット 藤掛哲夫。第二コルネット 服部久禧。トラムベツト、戸島新一。アルト 坂本二男。第一バリトン 伊東俊次、植原明夫。第二バリトン 吉川丞一。第一トロンボーン 戸田茂夫。第二トロンボーン 海城濟。バス 岡田裕、前田利之。大太鼓 金堀伸夫。小太鼓 千坂不二夫

判員 小島山、小山清、高橋二郎

競技者 四百米繼走 井上直明、船津行、服部弘文、緒方正希、大木博、秋山格、鷹松周一、佐藤與三。走高跳 加納一雄、身深正明。圓盤投 横田義夫、納富克己

一、ラ式蹴球戦

役員 主審 永田正全。線審 佐々久、上野信一。球係 林殿、高橋春雄。採点係 西村次彦
 競技者 東軍(白) 1 吉松廣延、2 森良三、3 森崎策期、4 水町潔、5 徳永義男、6 市川正三、7 平井修、8 太田基、9 赤野道彦、10 田原義雄、11 園田孝、12 松本安雄、13 松岡晋作、14 岩崎正男、15 古田正和、西軍(縞) 1 持永秋雄、2 吉原安雄、3 渡邊文吉、4 泉八郎、5 多賀將、6 加納安久、7 米澤末雄、8 村谷軍太郎、9 西脇正、10 安浪榮基、11 西山謙二郎、12 山本博、13 上村正直、14 山田功、15 西山富二夫

御 親 閱

御親閱豫行演習

今上陛下には、十一月十八日午後一時十八分より、帶山練兵場に於て、鹿兒島を除く九州・沖繩・山口各縣下の男女中等程度以上の學生生徒、青年訓練所生、男女青年團員(實業補習學校を含む)及び在郷軍人に對して、御親閱あらせれる御豫定に付、十月二十日午前十一時より該所に於て、分列部隊たる第一集團熊本縣下中等學校生徒、第二集團熊本縣下青年訓練所生、第三集團熊本縣下男子青年團員、第九集團熊本縣下高等專門學校生徒、第十集團熊本縣下在郷軍人員及び奉唱部隊たる第十四集團熊本縣下女子中等學校生徒、女子青年團員、凡て二萬七千七百五十四人の豫行演習が行はれた。而して本校よりは、武藤校長、中山・上田・藤田の諸教授の外、配屬將

御親閱概況



御 親 閱 (徒生校本はるな前も最)

校陸軍歩兵中佐三谷與八郎氏は第一大隊長、體操科擔任の森豊彦・峰繁・内藤一吉の三氏は、夫々第一・第二・第三中隊長として、全校生徒九百二十一名を率ゐる、第九集團の一部として參加したことは申すまでもない。

待ちに待つた御親閱の日は來た。各隊は午後零時半までに整列を了へ、係員も夫々部署に就いた。式場正面に設備せられた大國旗は高く揚り、煙火は空に轟いた。

「氣ヲ付ケ」の喇叭は、託麻原頭に響き渡つた。鹵簿の先驅が、練兵場西端附近に達した合圖である。全員は直に不動の姿勢を取つた。陪列、陪觀、參列、拜觀者、受閱者中の職員、係員にして軍服制服等を着用せざる者及び奉唱部隊は、一齊に脱帽した。幾十萬となき拜觀者も、之に従つて脱帽した。やがて軍樂隊は、「君が代」を奏し始めた。鹵簿正に式場の入口稍前方に達した知らせである。間もなく 天皇陛下は、颯爽たる英姿を御親閱臺上に現し賜うて、玉座に着御あらせられた。一聲の喇叭と共に、全員は一齊に最敬礼を行ひ、軍樂隊は再び「君が代」一回を奏樂した。閱として四邊に聲なく、嚴肅そのものの状態である。

關係各縣知事と共に、畏みて御前に整列せる熊本縣知事は、八歩前進し、各

知事と同時に恭しく最敬礼を爲し、御親閲を仰ぎ奉る旨を奏上して、再び八歩退き、一同 玉座の左後方に移り侍立した。敬禮點の標兵は配置された。かくて「前へ」の喇叭奏は吹奏せられ、軍樂隊は直に行進曲を奏して所定の位置に就き、全員十二集團五萬一千四百三十五人の諸隊は分列を開始し、幾十疏となき校旗團旗等は、揺々として動き出した。分列は大隊を單位として行はれ、第一集團第一大隊より順次に發進し、集團長は第一標兵の線に至りて單獨に敬禮を行ひ、大隊長は第一標兵の線にて「頭右」の號令を下し、大隊の全員一齊に玉座に注目するや、陛下には長くも御擧手の御答禮を行はせられた。第二標兵の線に至れば、集團長は單獨に「直レ」を行ひ、大隊長は大隊に「直レ」の號令をした。第二第三と行進は続けられ、陛下には一々御答禮を賜はつた。分列式を終れる大隊は、所定の位置に至りて「左向止レ」を行つた。

かくして各隊ともに、歩武堂々、一絲亂れず、天晴の出來榮えを以て分列は濟んだ。軍樂隊は曲目を改め、奉唱隊誘導の爲に前進し、定めの線にて轉回して奉唱隊の前進を待つた。一萬四千五百七十一人より成る奉迎歌奉唱部隊は、奉唱部隊指揮者の號令に依つて前進を起し、軍樂隊と合して奉唱位置に着き、停止の後 玉座に向つて最敬礼をなした。陛下の御答禮するや、軍樂隊の奉迎歌の奏樂に續いて、軍樂隊の奏樂に和しつゝ、御親閲奉迎歌「一、あゝ、にすめらみことの 鳳輦を迎へまつれり 鳳輦を迎へまつれり み光に阿蘇の高嶺も 有明の海もかがよふ 二、あゝ、今しすめらみことの 御姿を拜みまつる 御姿を拜みまつる み恵のいかなる幸かかしこさに涙ごぼるる 三、を、われら生けるかひあり おほけなき今日のほまれを おほけなき今日のほまれを 萬世に語りつぎつゝ、ことほがむひとつ心に」を奉唱した。奉唱する萬餘の若き女子も、之に耳欽つる老若

男女幾十萬の民草も、唯々感激の二字に盡された。

奉唱は了つた。各縣知事は時を移さず玉座に面して、指揮臺の右方に位置した。軍樂隊の奏する「君が代」の第一節に續いて、御親閱拜受團體全員は、「君が代」一回を奉唱した。熊本縣知事は、軍樂隊長と替つて臺上に入り、玉座に正面して、嚴かに高らかに「天皇陛下萬歲」と唱へた。全員は「萬歲」と和し、而して三度重ねられた。萬歳の聲は山野に響き渡つた。後は復び靜肅そのものである。

熊本縣知事は臺上より下りて、玉座の前方二十歩に至り、各縣知事と一列に列びたる後、更に鞠躬如として八歩を前進し、謹みて本日の行事終了の旨を奏上して、再び元の位置に着いた。各縣知事の最敬礼と共に吹奏せられる喇叭を合圖に、全員は同時に最敬礼を行つた。陛下は玉座より御答禮を給ひて、除に還御の途に就かせられた。軍樂隊は再び「君が代」を奏し出した。全員は「氣ヲ付ケ」の姿勢を取りて奉送した。時に午後二時十分であつた。

嗚呼、み恵のいかなる幸か、かしこさに涙ごぼる御臨幸も、御親閲も、かくして感激と歡喜との裡に滞りなく濟んだ。おほけなき今日のほまれを、萬世に語りつぎつゝ、ひとつ心にことほがんも、實に生けるかひありてのことである。

第五節 第十三臨時教員養成所

大正十五年四月一日、文部省は告示第二百三號を以て、第十三第十四及び第十五の三臨時教員養成所を増設し、